

オリンピック・パラリンピックを読む

清水義明監，小谷究・谷釜尋徳編『籠球五輪』流通経済大学出版社，2020年

綿貫慶徳

「中高の部活は盛んだけど、実力はイマイチ、女子はまあまあ強いけど・・・」、長らく、バスケットボール男子日本代表チームに投げかけられてきた世間の漠然とした印象である。日本スポーツ界において、男子バスケットボールは、愛好者数と国際競技力とでベクトルの相乗性を欠いたパラドキシカルな側面を持つ、何とも不思議な存在であり続けてきた。そのためか、明治時代の体育教師、高橋忠次郎の手による『籠毬競技』が1904年に発行されて以来、一世紀以上の歴史を有する日本のバスケットボール研究において、幾多の技術指導書はまとめられても、男子日本代表チームに軸足を置いた歴史的省察が試みられることはなかった。先に控えたオリンピックを堪能する縁として、今日、バスケットボールの技術史研究を牽引する著者達によって編まれた『籠球五輪』は、バスケットボール研究史上において、長らく放置されてきた空白部分を考証した意欲的な取り組みの賜物である。

1936年のベルリン大会、1956年のメルボルン大会、1960年のローマ大会、1964年の東京大会、女子日本代表チームを含めた東京大会以後に立ち上がった事象について、それぞれ4人の著者がまとめた本書に通底する記述の中心軸は、「本書において語られてきたように、バスケットボール日本代表は世界の『高さ』や『強さ』に対抗するために、挑戦と失敗を絶えず繰り返しながら不屈の精神で成長を遂げてきた歴史を持つ」との後書きの一文に集約される。「サイズ」の克服に向けた、

＜課題の提示⇒対応策の検討⇒実戦⇒課題の提示＞というサイクルを参照点としてオリンピックをめぐる代表チームの動静を仔細にまとめた記述からは、「サイズ」に劣る日本が経験した試行錯誤の実際を知ることができるが、とりわけ、以下の内容は、心に重くのしかかったものであった。

- ・3回戦敗退に終わったベルリン大会の最中に開催された国際バスケットボール連盟第1回総会の場において、「日本は身長180cm以下のクラスと身長制限のないクラスのクラス別を提案し、190cm以下のクラスを設けることが決定された。しかし、ベルリンオリンピックの4年後に計画されていた東京オリンピックが戦況の悪化のため中止となり、身長のクラス別が実際に施行されることはなかった。」
- ・結果10位に終わったメルボルン大会の予選リーグ初戦、大敗を喫したアメリカ戦において、「平均身長195cm、体重93kgをほこるアメリカのスタープレイヤーとまともにセットオフenseで張り合っても太刀打ちできないことから、日本のボールになった時は思い切ってファストブレイクを試み、ディフェンスでは2-3ゾーンディフェンスを用い、プレイヤーを適宜交代させて体力の消耗を防ぐことにした。」
- ・全敗に終わったローマ大会を総括して、「取り組んできたオールコート・プレスディフェンスによって前半を対等に展開するものの後

半にかけて攻略されてしまい、さらには疲労が重なりゴール下を思う様にやられてしまった展開が多かった。」

- ・東京大会に向けたチーム強化を進めるなか、男子日本代表チームの指揮を執った吉井四郎が考え出した戦術について、「相手が海外の大型プレーヤーになると、そのリーチの長さからゴール下でディフェンダーの守備範囲から離れてシュートするのは容易ではないことが判明した。そこで、吉井が次に考え出したのは、相手の体勢の逆をついてシュートチャンスを作ろうとする攻撃法だった。」
- ・攻防ともにオールコートでハイペースなバスケットボールを駆使して、1975年の世界選手権で準優勝をはたし、女子競技が初めて実施された翌年のモントリオール大会での勝利による銀メダル獲得の可能性が濃厚であったブルガリア戦における敗戦を受けて、「残り8分で13点のリードを奪っていた日本は、ここから嘘のように攻撃の足が止まりブルガリアの猛追を受け、ついには残り44秒で逆転を許してあえなく敗戦する。JOCの公式レポートは、この試合を『スピードのバスケットは恐ろしい消耗を生む。もしその消耗が空白に結びついたら、これは悲劇的というほかない。』と表現した。」

「サイズ」の克服に向けた紆余曲折を経る中で、今日の日本代表チームは、男女にたがわず、世界のトップレベルで競い合うための一つの理念型を共有するに至っている。それは、本書に記載された、2016年のリオデジャネイロ大会で女子日本代表チームの監督を務め、予選リーグで格上の国々を退けて日本をベスト8に導いた内海知秀の大会総括談に代弁される。

リオデジャネイロ・オリンピックを総括すると、アメリカは別格の強さを持っているが、それ以外の国々には対等に戦える力を日本もつけ

てきている。格上の国々に勝利し、スピード、組織的攻撃、守備、外角シュートの確率、速いゲーム展開等まだまだ課題はあるものの、日本の特徴をしっかりと出すことが出来た大会であった。

「スピード、組織的攻撃、守備、外角シュートの確率、速いゲーム展開」、日本がオリンピックへの道を断たれ、また、オリンピックで数々の試練に直面する中で、個別的・総合的に探求を重ねてきた要素である。その時々々の日本代表チームを支えた関係者による英知の爪痕は、日本の掟として、時系列に基づきながら歴史的事実を細やかに目配りした本書の随所に散りばめられており、この点にこそ、本書の白眉が示されている。

副題に注目してみると、「バスケットボール・オリンピック物語」とある。オリンピックと男子日本代表チームの関係史に大半の記述を割いた本書では、決して各大会の競技シーンに限定されることのない、その時々々の国際的なバスケットボール界の動向を視野に収めながら、男子日本代表チームの足跡の全容解明に力点が置かれている。そのために本書は、副題の範疇に沿った読み物として関心を引き起こすばかりでなく、今後のバスケットボール研究において基調となる記録集としての役割を果たしている。記録集としての本書の資料的価値について、主だった点を列挙すると、以下のとおりである。

- ・オリンピックやアジア大会の報告書やパンフレット、日本バスケットボール協会の発行物等より転載した表から、歴代男子・女子日本代表チームの構成スタッフ、メンバーを確認できる。代表選手の身長・体重、および、所属チームが記載されており、時代ごとのチーム編成の特色や国内有力チームの実際をうかがい知ることができる。
- ・オリンピックやアジア大会、ユニバーシアード大会の報告書等より転載した表から、オリンピックやその前後に開催された国際大会に

おける勝敗，各試合のスコアを確認できる。時代ごとの世界におけるバスケットボールの勢力図を把握できるとともに，本文に記述された試合レポートと合わせて，日本代表チームの試合内容の詳細をうかがい知ることができる。

- ・オリンピックやアジア大会等の報告書やパンフレット，日本バスケットボール協会の発行物，バスケットボール専門誌より転載した写真から，時代ごとの競技シーンや競技環境を確認できる。1970年代までの写真に収められたコートラインに注目してみると，2ポイントのみが認められていた国際ルールに基づく試合模様を実際を垣間見ることができる。
- ・各種資料に基づいて，オフENSE・フォーメーションに関わる図が転載・作成されている。オフENSE・フォーメーションが多様化・複雑化・複合化する今日の競技現場で指導にあたる者にとって，本書にある図は，あまりにも陳腐化・平板化したものにうつるであろう。しかし，これらは，試行錯誤の末に考案された日本代表チームの証であり，今後いかなるオフENSE戦術が編み出されても，多分にしてそれらの基盤をなすことは確かなところである。
- ・本書を構成する各章の執筆責任者は，多様な資料を用いながら本文を展開している。それらは，1930年代から今日にかけてまとめられた，競技種目史，技術史，戦術史，人物史，国際交流史に関わるものである。この広範に及ぶ資料群は，人文社会科学領域のスポーツ史，スポーツ社会学，スポーツ人類学，および，領域横断的な運動学からバスケットボール研究を進めるうえでの主要文献を網羅している。

2020年の東京大会は，延期となってしまったものの日本代表チームへの期待は高まるばかりであり，それとともに，本書は学術的，社会的な関心を集めるであろう。恐らく，本書の骨子である，

「サイズ」の克服に向けた日本バスケットボールの理念型の到達動態の周辺部に目を向ける読者も少なくないはずである。日本代表チームが今日の姿に至るまでの道程，注目沸騰の追い風状況下にある日本代表チームの今日，それぞれの時空をまたいだ私的関心事を以下に披瀝しておきたい。

<日本代表チームとスポーツ科学の協働関係>

1962年に日本バスケットボール協会内にトレーニングドクター制度が整備されたように，1960年代以降，スポーツ大国において著しい発展を遂げていくスポーツ科学は，時間の経過とともにアスリートの身体強化，運動技能の向上と密接不可分な関係性を築いていく。日本はローマ大会で，海外のビッグマンの卓越した強さと技量を目の当たりにし，それが今日にまで引き継がれる重点対策ポイントとなっている。その国々におけるスポーツ科学の発展の度合いが国際競技力に直結するとの定説に鑑みると，「サイズ」の克服に向けて，日本代表チームとスポーツ科学との間で結ばれてきた協働関係の実情に関心が及ぶところである。

<情報化社会の進捗と日本代表チームの情報戦略機能>

東京大会を前にした吉井四郎とピート・ニューエル（ローマ大会，アメリカ代表監督）の人的交流から導き出されたバスケットボールは，日本バスケットボールの理念型の構築に多大な影響を及ぼした。1960年代，1970年代におけるアナログなコミュニケーションに基づいた情報の受け渡しは，国際舞台における日本の雌雄を決するうえで重要な鍵であった。1980年代を端緒とする先進諸国を中心とした遠距離通信技術，コンピュータの普及にともない，日本代表チームの強化策に情報がいかに活用され，いかなる成果をもたらしたのか，試合前の情報戦が結果に大きく作用する今日の国際スポーツ界の趨勢に鑑みると，情報戦略機能の過去・現在への興味はつきないところである。

<日本代表チームの「連続性」と「断続性」>

2016年に創設されたBリーグの活況ぶりは、1993年のJリーグ発足を転機としてサッカー日本代表の国際競技力が一変したのと同様な空気感をバスケットボール界に漂わせている。また、これと相まって、国内外の高校・大学からNBAにまで及ぶハーフアスリートの活躍は、ほぼ、経験者やマニアに支えられてきたバスケットボール文化の変容を促し、社会の広範な人々を巻き込んだグローバルな色彩に塗り替えようとしている。この新生面を背景に、「サイズ」の克服に向けた日本バスケットボールの理念型は、今後とも日本代表チームの強化に継承されていくであろうが、日本代表チームが築き上げてきたバスケットボールの歴史に「連続性」とともに、思いもよらぬ世界

観を加えたポジティブな意味での「断続性」が刻まれる可能性を予期するところである。

丹念な筆致で日本代表チームの足跡をまとめた本書の行間の端々には、挫折を繰り返しながら前を向き続けた日本代表チームの将来に希望を寄せる執筆者たちの並々ならぬ熱い思いが滲みこんでいる。日本バスケットボール界の根底にある風土や慣習、バスケットボールを愛好する人々の競技精神に支えられた日本代表チームがいかなる歩みを遂げていくのか、そこに執筆者たちの研究成果がいかなる動力として作用していくのか、バスケットボール研究の更なる深化を期待しつつ、いつの日か綴られるだろう本書の続編を心待ちにしたい。